

った。与野の鈴虫は帰って来て庭へ放した。二、三日鳴いた。

その中に、丹後町で曲水吟社の連夜吟といふのが始まって、私も通知を貰った。私は早速樹人君を誘って出席した。

——夜の更けた明るい八畳に、浴衣の男が四、五人置物のやうに座つてゐる。縁側には秋草を描いた岐阜提灯が涼しく瞬いてその下にも、庭の芙蓉の闇に對つて膝を抱へた白地の男が一人二人座つてゐる。誰も彼も黙りこくつてゐる。山の手の町は、この静かな座を包んで、静けさの限りに更けるばかりである。

バサリ……ドタン……不意の物音が皆の耳を打つ。雨あがりの土に落ちる庭前の柿の実の音である。一人がむっくり顔をあげる。

「柿ですね。」

「え、。」

思ひだしたやうに、一口二口、口をきく。そしてまた黙つてしまふ。岐阜提灯の燈が少し揺れる。水のやうな風がすうっと流れる。句はまだ出来ない………。

連夜吟の夜々には、かうした思ひ出が殊に深い。

毎夜かかさず集つたのが、川越苔雨、青木よしを、梅林地球子の三君と、樹人君、私の五人だった。苔雨君、よしを君、地球子君の三人は、既にや、親密な間柄らしく、いつも決つて往復とも三人揃つてゐた。ホトトギスの例会で三君とも見かけた顔ではあったが、まだ樹人君や私とはろく／＼挨拶も交さない間柄だった。毎晩、七時頃から、三聯隊の暗い坂を上り下りして行つて見ると、きつと三君は床の間の側に膝を並べてゐた。私と

樹人君は自然それに対き合せに二人座る。先生は、次の間を後ろにその間へ庭に面して座る………：そして夜が更けた。

どうかすると、土方花醉氏が、中野から自転車でもやつて来て、裏口からのつそり入つて来て、さうかと思ふと、縁側に匍ひつくばつたやうな恰好で句作に加はる事があつた。大谷碧雲居士の微笑を含む温顔が本郷から来て交る夜もあつた。当時一寸の間曲水編集所になつてゐた安藤黙断子氏が、今の「土上」の栗原秋羅氏と校正刷か何か持つて見えた晩もあつた。何とか蕪吟君といふ人も三、四夜来た。其後つい会はないが、この人は面白い人だった。頭の痛むやうな句案中、後架に入つて吃驚するやうな大きな音をたてたり、何時の間にか縁側の暗がりではなで、ゐたり、しかし、やつぱり熱心に句作した。ある晩「馬の尻に巾著茄子雲りけり」といふ句を作つて、思わず、腹の痛くなるまで一座を笑はした事があつた。この句は、今なほ口にして見ると何故か、やたらにをかしくなつて、私達の間で當時を思ひ出させる懐しいよすがになつた。思ひだした。味方蕪吟君健在なりや。

この句座は二題十句といふ定であつた。お互ひにまだよく知らない同士ではあり、いつも先生が早くから座つてゐる句座であつたから、勢ひ、誰も言葉寡なに全く無駄口一つきかず頭を抱へて作つたものだ。従つて随分苦しかった。

「出来ましたか………出来たらそろ／＼清書して………」と先生に言はれるまで、溜息もゆつくりつけないほどの緊張さだった。互選して、先生の批評があつて、さて帰るのが毎夜十一時